

マイケル・T・シーゲル著

『福音と現代―宣教学の視点から―』

第一巻 諸宗教と諸文化圏とのさま

ざまな出会い』

(サンパウロ、二〇〇五年)

山崎 裕 子

本書は、著者マイケル・T・シーゲル(Michael T. Seigel)神父が、名古屋教区南山カトリック教会の月報に連載した文面を勉強会用に工夫し、さらに学問的に裏付けして、南山大学学術叢書として刊行されたものである。キリスト教において現在生まれつつある新しいパラダイムを明確化するのに貢献できるなら、また現代世界における信仰生活に役立つ道しるべを少しでも提供できるならば(五頁)という目的で出版された。教会の月報をもとにしているのでわかりやすく書かれており、しかし、内容は示唆に富み刺激的である。

構成は、五章とまえがき、序論、結語からなる。『福音と現代』第一巻に該当する本書では、二十世紀においてキリスト教の使命の見直しを要した三つのテーマ(キリスト教と他の宗教の関係、キリスト教と文化の関係、キリスト教と

社会との関係)のうち前二者を取り上げ、キリスト教と社会との関係は、第二巻で取り上げられる予定である。

序論において著者は、世を愛することを訴えることが本書の課題である(一四頁)と強調する。現世に対する態度に、否定的な傾向と人間の使命を強調するより、肯定的な傾向の二つがあるとすると、キリスト教の歴史において前者が優勢であった。しかし、現世に対する否定的立場は聖書に一致するかどうか問いかける必要がある(一三頁)と著者は疑問を提示するのである。ゆえに、二十一世紀の初めに世を愛するとはどのようなことを探ることが、キリスト者と教会の使命であることになる。

第一章「現世における教会の使命」は、キリスト教の現世における使命がどのように理解されてきたか、その理解が現在どう変わりつつあるかを扱う。私たちはここで(まえがきにおいても触れられているが)、日本語の持つつびきならない問題に早くも直面する。すなわち、「宣教」は *missio* の翻訳であり、しかし「ミッシヨン(mission)」とは「使命」の意である(四頁)ので「ミッシヨンの本来の意味は「送ること」や「遣わすこと」(三七頁)」、「宣教」という言葉は *missio* の翻訳ではなく一つの解釈を表す単語である(三八頁)との指摘である。つまり、本来「ミッシオ」は三位一体論で「神が愛を注

ぐこと」を意味した(三六頁)の対して、「宣教」という言葉は、ミッシオの持つ広い解釈をカバーすることができないのである。では、なぜ「宣教」と誤訳されたのか。それは、「宣教」の使用が普及した時代の教会の使命(ミッシヨン)が「教えを述べる」ことであると理解されていたためである(四頁)。しかし、教会の使命に関する理解が時代と共に変わったにもかかわらず「宣教」という翻訳語を使い続けてそれが定着し(二七頁)、意味のずれが生じ、日本における宣教学や宣教に関する理解を妨げる結果をもたらしている(三八頁)。ちなみに、本書の副題に「宣教学の視点から」とあるが、宣教学の場合にはその使命を「述べ伝える」ということに限定している(一六一―一七頁)ので、翻訳の問題はない。通常、教会の使命は、内部に対する役割を「司牧」、外部に対する役割を「宣教」と表現するが、後者の訳語の用い方に問題があることから、筆者は外部と内部を分けてに教会の使命を考えている(三一頁)。

第二章「洗礼と救い」では、キリスト教の洗礼を受けていない人の救いの可能性について、教会史における理解の変遷をたどりつつ、洗礼を受けている人と何ら変わらないと結論づける(一〇八―一九頁)。洗礼と救いについては時代ごとに独特の考えがあり、キリスト以前に生きていた人、受洗後に異端に加わった人、キリスト

教を知りつつ洗礼を受けていない人、キリスト教を知らずにいる人、他の宗教を誠実に信じる人等に対してのさまざまな見解がある。しかし、教会史を貫くどの時代にも当てはまる考えは、神は愛であるということ、神はすべての人の救いを望んでおられるということである（一〇四頁）。洗礼を受けている人が他の人よりも善良で、神に近く、より上であるという考え方は否定されるべきで（一〇八頁）、それはキリスト教史を紐解いて十字軍、魔女狩り、植民地政策等のひどさをかんがみれば、誰もが認めざるを得ないであろう（一〇六頁）。

第三章「他の宗教に関する神学」は、カール・ラーナー (Karl Rahner) の「無名のキリスト者論」がかかえる問題点を指摘する。無名のキリスト者論とは、神がすべての宗教を通じて愛を伝えているので、キリスト教以外の宗教を信じる人も無意識のうちにキリストを信じる「無名のキリスト者」であり、信仰が未完成であるので、キリストに出会ったときにその人は改宗すべきであるという考え方である。問題点としては、無意識のキリスト者と言われて自分の宗教が侮辱されたと感じる人がいるかもしれないこと（一三九頁）、キリスト教以外の宗教に属する人は神との関係が未完成であるとする、神の限らない愛への信仰に反すること（一四三頁）、イスラム教はキリスト教誕生後に成立して

いるので、正しい宗教の準備のためであると解釈するのが難しいこと（二四四―六頁）、宗教否定、無神論、世俗化などに充分な対応ができないのではないかとということ（一四六―七頁）である。そして、無名のキリスト者論が宗教対話と相容れない（他の宗教の善をすべてキリストによるものであると考える、キリスト教が十分に伝えられたら他の宗教の有効性がなくなる）ことも、大きな問題点である（一四七―八頁）。

しかし著者は、無名のキリスト者論は一つの説であるので、問題点があってもおかしくはなく、それを踏み台にすればよいと考える（一四八―九頁）。そして、他の宗教をより肯定的に捉える、ポール・ニッター (Paul Knitter) の *No other Name?* とジョン・ヒック (John Hick) 編『キリスト教の絶対性を超えて』(The Myth of Christian Uniqueness) の内容を紹介する。

第四章「諸宗教とのかかわり」では、ラーナーの説との関連で、宗教を一切持たない人についても考えるべきであるとし、共同体について考察した後、宗教のさまざまな問題点を検討する。ガンジーがよく比較した上でキリスト教を否定してヒンズー教を選んだのに、それでも本当は無意識のキリスト教徒であったと言えるだろう（二〇二―三頁）と無名のキリスト者論の限界を指摘すると共に、すべての宗教を肯定しようとすることは、結局すべての宗教の否定にもなり得

る（二〇四頁）と警鐘を鳴らす。

第五章「キリスト教と文化」は、土着化を糸口にして考察が進められる。物事は自分が有する文化の中から理解する以外に道がない（二五一頁）のであり、キリスト教はどこかの文化圏に土着化したものである（二四二頁）。宣教師自身も自分の文化の中から信仰を理解している（二五一頁）のであり、神学も土着神学である（二四二頁）。私たちが再認識すべきであるのは、二十世紀初頭にキリスト教徒の八五パーセントが西洋に住んでいたのに対して、二〇〇〇年には、キリスト教徒の五六パーセントが発展途上国にいてることである。つまり、宣教地の逆転現象が起こりつつあるのである。著者は、今のヨーロッパにどのようなキリスト教が伝えられるべきかが重大な問いかけであると（二二―三頁）。もちろん、土着化の試みが逆に社会悪に加担する可能性があることの指摘（二四七―八頁）も、著者は忘れてはいない。

第六章「教会史と文化」では、土着化のプロセスにおいてキリスト教がどう影響されてきたかという宣教の視点から、ユダヤのディアスポラやキリスト教思想を歴史的に検討しつつ、論が進められる。キリスト教の土着化は意識的か無意識的かを問わずに必ず起こり、無意識のうち土着化の方がゆがみをもたらしやすい（二八三、二八八頁）。ここで言うゆがみとは、

教会と政治の癒着などを産み出すことを意味する。七—九世紀には、共同体での告解から個人告解へ切り替えがなされ、大罪と小罪の区別を表す罪のリストが作られるにいたった。その後には、罪とは何かという基本的な理解の変化がある(三一—一頁)。

結論で著者は、原点にもどること(キリスト教が何を教えたかを聖書などを通じてなるべく確認すること)ならびに自分の経験を見直し、その経験から学ぶこと、他者との交流(対話)を持つことによつて自分自身を見直し改めることを薦める(三三—二頁)。対話は、関係における和解をもたらす。

以上、本書の概要を評者の興味に沿って書いてみた。いくつか印象に残った点や気づいた点につき、述べてみたい。本書のキーワードは、パラダイムとミッションであると言うことができよう。パラダイムとは、周知のごとく、トマス・クーン(Thomas Kuhn)が『科学革命の構造』(一九六二年)において述べた、「特定の時代や集団が持つ共通のものの理解のしかたの下にある根本的な枠組み」のことである。第一章から第六章のいずれにも、パラダイムの転換が言及されている。それらは、従来私たちが持っていたキリスト教のイメージを覆すものであるかもしれないが、見逃しがちである問題点を見事に突いている。なかでも、著者がイギリスの

大学で見た新聞漫画の切り抜きの例は、非常に興味深い。ローマンカラーを着けた二人(皮膚が白く顔立ちがヨーロッパ系の人と皮膚が黒く顔立ちがアフリカ系の人)がかばんを持ち、前者のかばんには「アフリカの宣教へ」と書いてあり、後者のかばんには「ヨーロッパの宣教へ」と書いてある。アフリカ人は自信満々の顔で通り過ぎて行き、ヨーロッパ人は通り過ぎたところでびっくり仰天した表情で振り向いていたというものである(二二—七八頁)。この例に違和感を感じたとすると、その人は一種の先入観を持ってキリスト教をイメージしていたことにならぬのではないだろうか。キリスト者の少ないアフリカに宣教に行くという構図は今や成り立たないのであるし、発展途上国がキリスト教の主流になりつつあるのであるから。

ミSSIONの誤訳「宣教」の問題は、「罪」の概念を考える際にも大いに参考になる。著者は、日本語の「罪」の持つ意味が英語と異なることを指摘する。英語のsinは宗教の掟に反する行為に限定され、社会の法律に対する犯罪の意味は含まれていない。他方、「罪」という日本語の意味は英語のsinという言葉よりも意味が広くて重く、crime(犯罪)とsinの双方の意味を合わせ持つ。たとえば、ドストエフスキの『罪と罰』は、英語ではCrime and Punishmentであり、キリスト教で罪を意味するsinという単語

は用いられていない。しかし、日本語では「犯罪」ではなく、「罪」という単語になっている。そこから著者は、英語を母国語とする人と日本語を母国語とする人の信仰理解、もしかすると信仰そのものの間に違いが生じる可能性がある」と懸念を表明する(二三八頁)。しかし、英語のsinも翻訳語ではあり、日本語の「罪」と同様に「掟を破る」というニュアンスの方が、「道を誤る」という元来の意味(ヘブライ語)よりも強くなっている(二三—九頁)。これと関連し、宣教師たちによつてキリスト教が日本に伝えられたとき、彼らは、キリスト教の「愛」をどのような翻訳すればよいか考えあぐんだという話が出される。当時「愛」と言うと「不義」を意味し、「よこしまなもの」という意味に受け取られる可能性さえあった。結局、「大切に思う」という意味で「御大切(ごたいせつ)」と訳すことによつて、キリスト教の愛を伝えたというのである。神の愛を「デウスの御大切」、キリストの愛を「キリストの御大切」というように。それは、すぐれた的を射た訳語であるように思われる。愛の損なわれた状態が罪であると考えるならば、罪についての訳語にそこまでの配慮がされなかつたのは、なぜなのだろうか。それも、パラダイムによるのであろうか。

本書は考え方の流れがわかりやすく書かれており、宣教学が専門ではない評者も困難なく読

むことができた。さらに索引が作成されていれば、より利用価値が高まったのではないだろうか。そうすれば、「第一章（正しくは第二章）で引用したソクラテスやプラトンがキリスト者であったというユステイノスの理論」（一二六頁）のような前述箇所の間違いも避けられたであろう。一二九頁には、「すでに引用したソクラテスやヘラクレイトスがキリスト者だったというユステイノスの考え」と再度言及しており、出典の確認をしたい場合にはなおのこと、前述箇所の明示違いは残念に思われる。また、三二四―三五頁の注で明記している出典のうち、アウグスティヌスの『音楽論』は泉治典訳ではなく、原正幸訳である。

著者は一度も引用していないが、本書を読み進めつつ評者が何度も思い起こしたのは、「すべての人に対してすべてのものになりました」という『コリントの信徒への手紙一』第九章第二節の文章であった。現代のキリスト教におけるパラダイムの転換は、宣教、キリスト教、キリスト者、ヨーロッパという従来のイメージから、さまざまな使命、さまざまな宗教、さまざまな場所への転換を意味し、それはすべての人に対してすべてのものになることではないかと思えたからである。

本書によって多くを学ばせていただいたことを感謝すると共に、第二巻が早期に出版される

こと、著者による本書出版の目的が十分達成されることを願ってやまない。